

2018 年度第 2 回東北地理学会研究集会

第 5 回地理教育研究グループ研究集会

「新高等学校学習指導要領地理歴史科地理について考える」

本研究集会は、「新高等学校学習指導要領地理歴史科地理について考える」をテーマに、2018 年 3 月 31 日(土)14:00~16:00 に宮城教育大学 2 号館 2 階 224 号室にて開催された。参加者は、大学教員 3 名と宮城県内公立・私立の現職高等学校地理教員 5 名の計 8 名となった。企画開催者の宮城教育大学吉田剛により、新高等学校地理科目「地理総合」について報告がなされた。その後、宮城教育大学西城潔の司会のもとで、現場地理授業を取り巻く様々な問題について意見交換がなされた。

吉田剛は、日本地理学会地理教育専門委員会による資料:「地理総合」とはどんな科目か? (<http://www2.dokkyo.ac.jp/~rese0018/20180323AJG.pdf>) を用いて、新しい地理科目の考え方などについて報告した。本資料は、「地理総合」に関する講習会(2018 年 3 月 23 日、日本地理学会春季大会、東京学芸大学)に用いられ、全国各地の研修会での使用が認められている。そして 2018 年 3 月末には、新高等学校学習指導要領(本文)が公表された。

新高等学校学習指導要領地理歴史科・公民科の科目構成は、「地理総合」「歴史総合」「公共」の各 2 単位科目は全て必修となり、「地理探究」「日本史探究」「世界史探究」の各 3 単位科目と、「政治経済」「倫理」の各 2 単位科目は選択となった。現場教員からは、地理を専門とする教員が今後どれほど増加するかといった議論から深刻な問題が指摘された。それは、歴史を専門としながらも地理専門枠で受験した者が合格するケースが幾つかみられることである。その他、各学校における地理専門教員の供給状況の偏りや、教育課程における各科目の配置などの話題や意見が出された。

「地理総合」は、資質・能力の三つの柱に「地理的見方・見方」のもとで、「何を学ぶか」・「どのように学ぶか」・「何ができるようになるか」から学ぶものとなっている。現場教員からは、従来の説明伝達型授業からどのように脱却できるのか、といった議論が行われた。ここでは、「新しい方向が示されても再び同じものに戻るのではないか」、「大学入試が大きく変わる事実がほしい」、「各学校にタイプがあるので難しい」、「評価をどのようにするのか」などの意見がみられた。そこで吉田剛は、対話型学習による授業マネジメント(予習のさせ方、思考の記述そして発表、相互評価、ICT 活用など)のあり方や評価の仕方(ポートフォリオやルーブリック、評価の三観点)などの情報提供を行った。宮城教育大学佐々木達からは、大学授業における予習の意義が指摘され、高等学校現場との対比から、予習を無くして十分な思考・判断させる場面は見いだせないとの議論に至った。

とくに、GIS についての活発な議論もみられた。現場教員からは、次の四つが指摘された。
①学習環境が用意できない点。PC 教室などは各学校内に一つしか無く、同時に使用できない制約があり、また各教室内で生徒一人一人にタブレットを持たせて授業できる環境にな

い。②授業時間の確保や授業準備などが難しい点。大学受験指導や部活動指導に必要な時間の確保への不安が背景にある。③GIS 操作技術の理解がほとんど無い点。改善策として、大学での講習会などに参加するとの意見が得られた。また、複数の主題図を重ね合わせて考える講習会にも興味を持たれた。④活用性の高いアプリケーション・ソフトが欲しい点。この点には、デジタル教科書、タブレットの常用、教室内 ICT 環境の充実も大きく関わる。他方で、フィールドワークの重要性も議論され、大学教員による巡検企画などが要望された。以下に発表要旨を掲載する。

執筆者：吉田剛（宮城教育大学）

高等学校学習指導要領地理歴史科地理について考える

吉田剛（宮城教育大）

本報告は、日本地理学会地理教育専門委員会による資料：「地理総合」とはどんな科目か？（<http://www2.dokkyo.ac.jp/~rese0018/20180323AJG.pdf>）を用いて、新しい高等学校地理歴史科地理の科目の特色を中心に新学習指導要領の考え方について報告する。なお 2018 年 3 月 29 日には、新高等学校学習指導要領（本文）が公表されている。

新高等学校学習指導要領地理歴史科・公民科の科目構成は、「地理総合」「歴史総合」「公共」の各 2 単位科目は全て必修となり、「地理探究」「日本史探究」「世界史探究」の各 3 単位科目と、「政治経済」「倫理」の各 2 単位科目は選択となった。これにより、世界史必修の縛りが解け、また 4 単位 B 科目の選択制などによって、各専門科目の教員配置バランスが変化することが予想される。

新学習指導要領では、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、「何を理解しているか、何ができるか（知識・技能）」、「理解していること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力・人間性等）」の三つの柱に整理し、各教科等の目標や内容にも、この三つの柱に基づく再整理が図られた。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善が求められた。その中では、深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要であるとされた。「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という物事を捉える視点や考え方であり、各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすものである。つまり、地理学習では、地理的見方・考え方となる。そして地理的見方・考え方を構成する地理的概念には、国際地理教育憲章による六つがあげられた。

「地理総合」の内容は、A 項目：地図や地理情報システムで捉える現代世界、B 項目：国際理解と国際協力、C 項目：持続可能な地域づくりと私たちの三部構成となっている。とくに A 項目の GIS 学習では、地理的見方・考え方の育成、地図などのツールの活用力の向上、地理的技能としての探究的な学習などが求められる。AI の飛躍的な進化を見据えると、実

践での効果的な取り組みが期待されている。また C 項目の生活圏の調査では、A・B 項目の学習成果を踏まえ、「持続（可能）性」（吉田，2016）に着目した地域の調査活動などが考えられる。今後、高等学校地理教育現場には、本学会や大学などの外部機関と連携しながら、GIS や巡検などの一層の充実を求めたい。

吉田剛（2016）：諸外国地理カリキュラムにみる「持続性」に関わる地理的概念. 新地理, 64(3), pp.82-92.